

魅力ある郊外での暮らしに関する研究
ーイギリスの事例からまちづくりの担い手と住人の課題を探るー

石見 豊(国士舘大学政経学部政治行政学科 教授)

【研究報告要旨】

本研究は、魅力的な郊外における暮らしについて考えることを目的としている。コロナ禍の影響を受けて、研究計画を一部変更し、文献研究を中心に、英国の田園都市であるレッチワースの発展やまちの維持管理の状況、そして、日本における田園都市の形成の状況と近年見られる郊外住宅地の再生の動きなどについて整理した。結論として、次の2点についてまとめた。

【誰が、どんな手法で、郊外地域を開発・維持管理するのが良いのか】

レッチワースの事例は、国の法律を根拠にした財団の活動で、日本では応用が難しい。山万株式会社が手がけるユーカリが丘の事例は、レッチワースの財団に近い働きをしている。ただし、一民間企業に依存した手法では、多くの地域での応用可能性に限界があるように思える。

そう考えると、民間デベロッパー、UR、自治体（行政）などのいずれかが主体になるものの、これに地域住民を加えた複数のアクターの連携・協力のしくみにより、郊外地域の再生を進めるのが現実的な手法と言える。

【住民が、どうまちづくりに関与するのが良いのか】

地域住民の協力があると、団地の建て替えなどがスムーズであるというような実質的な利点もある。また、住民による地域の環境を守ろうとする努力の積み重ね、つまり住民による「シビックプライド」が郊外地域の魅力や価値を高めてきたことも、日本の田園都市の歴史が示していた。

ただし、その際の地域住民とは何か。自治会・町内会のような伝統的な地縁のコミュニティもその1つであるが、それ以外に趣味などを通じたテーマ型のコミュニティもある。時には、地域の環境を守ろうとする抵抗型の住民運動も含まれる。そうした多様なコミュニティが郊外地域での暮らしを魅力ある豊かなものにするという点が本研究の最も強調する結論である。